

近年、地図学史あるいは地理学史研究について言われる、「進化論的パラダイム」に依拠している部分は、本書にも認められる。しかし、以上で見てきたように本書をそのようなパラダイムだけで括ってしまうには、あまりに重要な部分を見失ってしまうであろう。著者の「地図の精神史」、あるいは作図者・使用者への視点など社会史的な視角は、進化論的な見方に必ずしもなじまないものである。

(青山宏夫)

矢守一彦著 古地図と風景：筑摩書房，1984年，A 5 判，343頁，2,400円

本書の著者は、前掲の室賀『古地図抄』の編集の労をとられている。両氏は、矢守氏自らが「山科の大人」（矢守「都市図の歴史—日本編」1974年）と仰ぐように、いわば師弟の関係にある。そこで、本書は必ずしも古地図のみを扱ったわけではないが、本稿では前掲の『古地図抄』との関連で、とくに著者の地図観に焦点をあわせることにする。

本書は、第Ⅰ部「地図と風景画の狭間」、第Ⅱ部「街道の風景」、第Ⅲ部「京・大坂の絵図」、第Ⅳ部「古地図を眺めて」の4部から構成されている。

書名の「風景」という用語は、従来の地理学ではあまり使われることがなかった。それがあえて書名に選ばれた点に、本書のライトモチーフを見い出すことはあながち無理なことでもあるまい。この点については、冒頭の第Ⅰ部第1章「風景のランゲージュ」で適確に述べられており、本書全体の格好の序章となっている。それによれば、著者は景観の一般的側面よりも、むしろ主観的側面に注目しようとする。その時、「自己のパースペクティブで捉えた空間、私が眺め、その中で生きている環境の眺めという意味合いをひびかせて使われている風景」という用語が選択されることになる。つまり、それによって主体にとって意味のある場所としての景観を再考してみようとする。これは、近年のヒューマニスティック地理学の立場と共通するものである。今あえて風景をとりあげることの意義の1つはここにあるとも言えよう。

冒頭でも述べられているように、本書で扱われる地図は、近世のものである。したがって、表現様式からすればいわゆる絵図がほとんどである。これらの絵図の分析にあたり、特定の絵図の個別的な考証ではなく、著者はこれらの絵図に広く認められる

<ランゲージュ>に注目し、通図的な検討を試みる。まず、描かれた絵図の視点の高さに注目する。本書で扱われる近世の絵図には、鳥瞰図的表現のものが多く、この鳥瞰図の源流やその意義を扱うのが第Ⅰ部第2章「鳥瞰図史考」、第3章「名所図会とその周辺」である。そこでは、鳥瞰図は日本古来の伝統的表現であるとした上で、それが必ずしも地図作成技術の未熟さを補うために採用されたものではないことを繰り返し強調する。著者は、絵図作成以前にも平面図が作成されており、平面図と絵図とは進化系列の中で必ずしも先後関係になるとは限らないとする。そして、鳥瞰図的表現は「わかりやすさ、親しみやすさをはかる」ために採用されたとする。「地図は正確ばかりが能ではない」「地図の風景画化」によって、空間的配置を示すに適した地図（平面図）と、美しく楽しい絵画との間をゆれ動く絵図は、大衆性や芸術性の観点からも検討される必要がある。従来の地図史研究に卓越していた「進化論的パラダイム」ではすくい上げることのできない、このような視点からの地図史研究は、著者の「地図の社会史」との関連で、今後の1つの課題となるであろう。

その他、絵図の分析視点については、第Ⅲ部第1章「京都図の流れ」、第2章「京の一覧図について」、第3章「『増修改正摂州大坂地図』に関する覚書」などにみられるように、表現範囲の広狭、地誌的記載事項の多寡、諸地物の空間的配列の精度などを手がかりとして、地図相互の系譜的關係や地図史の時期区分などを行なっている。しかし、第Ⅲ部第3章の「地図の社会史」にもみられるように、絵図をそのようなタテ系の中に位置づけるだけでなく、それぞれの絵図がそれぞれの時代にもちえた意義や、それぞれの絵図が機能した時代の「社会集団のマンタリテ」との関連にも注目している。地図へのこのような「まなざし」は、室賀の「地図の精神史」にも通ずる所がある。

「私の眺め」である風景が最もよく描かれるのは、表現する範囲の比較的狭い<大縮尺図>である。したがって、本書で扱われる古地図は、都市図、町絵図程度の表現範囲のものが中心である。この点で、世界図や日本図などの<小縮尺図>を対象とする前掲の室賀『古地図抄』とはたしかに異なると言える。しかし、これは風景というキーワードを表面的にしかとらえない場合である。それをスケー

ルに関係なく主体にとって意味のある「花も実もある」空間とすれば、むしろ両者の根底には共通の地図史観を認めることもできよう。すなわち、古地図を現代の地図観や地理観の文脈だけで考えるのではなく、それが作られた時代や使われた時代へもどし、当時の地図観や地理観あるいは社会観などの脈

絡の中で評価することである。

本書は前掲書とともに、地図学史のみならず、地理思想史あるいは「場所の意味」を模索しているヒューマニスティック地理学に対しても広く長い射程をもつであろう。
(青山宏夫)